

少女漫画における男装：ジェンダーの視点から

谷口, 秀子
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/5433>

出版情報：言語文化論究. 15, pp.105-114, 2002-02-15. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

少女漫画における男装

— ジェンダーの視点から —

谷口 秀子

1. はじめに

日本における漫画というメディアの大きな特徴は、作品が、大きく分けて、男性向けの漫画と女性向けの漫画とに二分されていることである。このことは、作品が発表される雑誌が少年および青年向けの男性誌と少女および女性向けの女性誌に分かれており、多くの場合、作品はまず漫画雑誌に掲載され、その後単行本化されるというシステムと深く関わっている。つまり、雑誌に掲載される漫画作品が創作される際には、女性誌においては主に女性の、男性誌においては主に男性の読者が想定されているからである。そのため、それぞれの性別向けの漫画は、女性または男性の一方にとって、共感が持て、都合が良く、心地よい、一種のファンタジーとでも呼べるものになっていると言える。それゆえ、このような漫画には、女性、男性それぞれの価値観や思いこみや願望がかなりストレートに反映されていることは、疑いの余地がないであろう。

女性向けの漫画（少女漫画）¹⁾ は、男性向けの漫画が男性にとってそうであるのと同様、女性の関心のある問題を取り上げたり、女性読者の共感を呼び起こしたりして、女性にとって心地よいように作られるのが普通である。そのため、このような少女漫画においては、女性の側からの世界観や女性の価値観や願望などが色濃く反映され、登場人物や話の展開にもそれらが投影されることが多いのである。従って、少女漫画が女性を引きつけて離さないのは、そのあたりに原因があると言えよう。

社会生活のみならず、文化や娯楽の面においても、「男には気持ちいいが女には不快なもの」の存在は、数え切れないほどもある²⁾ ということは、女性ならば誰もが感じることであろう。例えば、一般の新聞においても、家庭欄などのごく一部の紙面を除いて、どう見ても男性の視点から、男性の読者を想定して書かれたとしか思えない記述を眼にすることがある。しかも、このような一見客観的な文章に反映された男性固有の価値観や固定観念が、これまで長い間、普遍的な価値観であると考えられてきたのは事実であり、女性の読者がそれに対する違和感や不快感を意識化し口にし始めたのは、ごく最近のことである。また、テレビのドラマにしても、登場人物の設定や筋立ての中に男性独特の価値観や女性に対するステレオタイプ的な見方が反映されていることが少なくない。さらに、幼児、児童向けの教材にしても、中心的なマスコットキャラクターとして登場するのは男の子または男の子に擬人化された動物などがほとんどである。幼稚園の運動会などでも、男の子は力強い組み体操、女の子は優雅なダンスというように、子どもたちに因習的な性別役割を課すことによって、幼いうちから固定化したジェンダーの再生産をしているように見受けられる場合もある。このような状況の中で、女性の価値観にもとづいて女性に向けて発信さ

れる少女漫画は、「女に生まれたみじめさ」³⁾とまでは言わないにしろ、このような、男性の価値観や固定化されたジェンダーの押しつけに対する違和感と不快感、そして、社会の本流はあくまで男性であり女性はその中に入り込めないという諦めに近い気持ちから女性を解放してくれる心地よさを持っているのである。

2. 男装のモチーフ：『リボンの騎士』

少女漫画に特徴的なモチーフの中で、女性の読者にとって心地よいもののひとつに、女性登場人物の男装がある。ここで言う男装とは、単に女性が男性の服装をすることではなく、男装をして社会的に「男性」として行動することである。このような、少女漫画において今日まで続く、男装の麗人⁴⁾というモチーフを確立したのは、手塚治虫の『リボンの騎士』⁵⁾である。『リボンの騎士』は、1953年から56年まで、少女漫画雑誌『少女クラブ』に連載され、その後、主人公サファイアの冒険のエピソード等を中心に改変されて、1963年から66年の間、『なかよし』に連載された。また、後にアニメ化されてテレビで放映され、大きな反響を呼んだ。2つの版のうち、現在単行本の形でよく読まれているのは、『なかよし』版の『リボンの騎士』の方であり、アニメ版もこれに依っている。

主人公のサファイアは、天使の間違いによって女の心と男の心の両方を持って生まれてしまった女性である。彼女の国では女性に王位継承権がない。そのため、国王の娘であるサファイアは、王位を狙うおじのジュラルミン大公一味の企みを退けるために、生まれた時から王子として育てられ、彼女が女性であることは秘密とされる。サファイアは、社会的には、毅然とした男性として振る舞い、男装をして男言葉を話す。また、白馬に跨り、剣をあざやかに操って勇ましい活躍をするサファイアの姿は完璧で理想的な男性像である(図1参照)。また、私的な時間に密かに女性の姿になる際には、サファイアは非の打ち所のない女性として描かれ、彼女の優しく美しい女らしさがことのほか強調される。また、サファイアは、王子としては隣国の王子に敵視されているが、女性の姿をした私的な場面では、名前や身分を隠した「あま色の髪の乙女」として、そのフランツ・チャーミング王子に好意を寄せられ、彼女も王子に惹かれて彼が苦境に陥った時には助けに向かう。サファイアは、おじによって女性であることが暴かれて王室を追われた後も、悪者一味や魔女などの敵を相手に勇ましく闘い、紆余曲折の末、最後にはフランツ・チャーミング王子とめでたく結婚することになる。

子どもの頃大好きだった漫画として、『リボンの騎士』をあげる女性が多い。設定の華やかさや筋の展開の面白さにもまして、多くの少女たちを魅了するのは、状況によって男性と女性を完璧に使い分けるサファイアの両性具有的な側面である。特に、この漫画が発表され、アニメが放映された当時、すなわち、読み物や漫画の主人公として、勇ましい冒険をする女性を描いたものがほとんどなかった時代、男性と同じように、いやそれ以上に自由闊達に活躍するサファイアは、少女たちの眼にこの上なく魅力的に映ったものである。また、彼女が男性として必要とされる剣などの技量を完璧に備えている一方で、女性の姿になった時には、美しく優しい魅力的な女性になることも、当時の少女たちのサファイアへの傾倒に拍車をかけることになる。また、現在とは違って、男性しか就けない職業(例えば、バスの運転士など)や、女性に完全に門戸を閉ざしていないとはいえ、ほとんど男

性ばかりで占められている職業が意外なほどたくさん存在していたため、小学生の頃からジェンダーによる制約を強く意識せざるをえなかった当時の少女たちにとって、「女だから」「女のくせに」というジェンダーの制約なしに活躍出来るサファイアは憧れの的であった。⁶⁾ すなわち、少女たちは、『リボンの騎士』というファンタジーの中において、男装して男になりきるサファイアに自分を重ね合わせることによって、女性の置かれている社会的制約を免れて、ジェンダーの垣根を越え、社会活動の自由を手に入れる心地よさを知ったのである。また、一方で、男装をしていない時のサファイアが女性性を保ち続けていることは、現在の自分の内面の女性性は保ったままで（例えば、素敵な男性と恋愛をすることなど）、男性と同じ社会的自由を獲得したいという女性たちの願いにもかなうものであった。女性であることによって、例えば、職業選択の範囲が制限されるということを始め、現在よりもさらに社会的制約に縛られていた時代の少女の夢は、男性と同じ行動力を持つ男勝りのお姫さまに投影されたのである。『リボンの騎士』の初出から50年近くたった現在、女性に対するジェンダーによる制約は確実に少なくなり、顕在化しにくくなってはいるものの、依然として形を変えて存在しているのは疑いの余地のない事実である。そのため、『リボンの騎士』に対して少女が感じる心地よさは、現在も変わらないし、ジェンダーを越える装置としての男装のモチーフは、その後も少女漫画の中に存在し続けているのである。⁷⁾

3. 『リボンの騎士』とおとぎ話

『リボンの騎士』は、王子として育てられた王女の物語である。女性がこの漫画に対して感じる心地よさは、上に述べた通りであるが、『リボンの騎士』には、誰もが知っているおとぎ話のパターンがうまく利用されているのもその心地よさを倍増させるのに大いに役立っている。『リボンの騎士』の設定はまさに西洋のおとぎ話そのものである。舞台は王国。サファイアは王女。フランツ・チャーミングは隣国のハンサムな王子。陰謀により、塔に閉じ込められる王女。天使や魔女や騎士の登場。王子の冒険の旅。王女と王子の結婚。これらは、おとぎ話で繰り返し用いられている要素である。

言うまでもなく、『眠り姫』や『白雪姫』などの西洋のおとぎ話には、固定化されステレオタイプ化されたジェンダー表現が随所に見られる。これらのおとぎ話の多くは、お姫さま（あるいは、後に王子の妻になる女性）と王子さまのお話である。女主人公は美しく気立てのよい、か弱い女性（「女らしい」女性と言い替えてもよい）であり、窮地に陥っても知恵を働かせながら健気に耐え、ひたすら誰かに助けてもらうのを待っており、自らの力でその苦境から積極的に脱出をはかったりすることはない。男性は、多くの場合王子であるが、強くて勇敢で（「男らしい」と言い換えてもよい）、危険をものともせず、苦難や障害を乗り越えて姫を助け出す。そして、男性は、その勇敢な行為の報償として、助け出した姫を妻として娶るのである。⁸⁾

『リボンの騎士』がおとぎ話のパターンを周到に踏襲しているにもかかわらず、おとぎ話とは決定的に異なる点がひとつある。言うまでもなく、主人公であるサファイア王子が女性であることである。『リボンの騎士』というおとぎ話の中で、サファイアは男として育てられ、男装をすることによって、女性でありながら、「王子」という記号を与えられ

ている。すなわち、女性であるサファイアは、おとぎ話の定石である、ひたすら王子を待ち続ける姫ではなく、おとぎ話の王子の持っている特質、つまり、危険を伴う冒険に立ち向かう勇気と行動力を付与された「王子」なのである。そして、彼女の美しいドレス姿や女性らしさを強調した描写の繰り返しによって、サファイアが女性であることが、絶えず読者の心に喚起され、彼女が、男性と同じ（いや、並の男性以上の）能力を持つ女性であることが強く示されるのである。このような、「王子」の記号を持った女性であるために、サファイアは、閉じ込められた塔の中で王子の助けを待つのではなく、自ら踏み出して悪と闘うために騎士として勇敢に闘うのである。

現代の女性にとって、おとぎ話と言えば判で押したように、自分で問題を解決せずに男性の助けを待ってばかりいるお姫さまたちが出てくるのは、大いに違和感を覚えることである。苦難に立ち向かおうとせず、ひたすら待ち続けるお姫さまの姿を見せられるたびに、たまには違うタイプのお姫さまがいてもいいのではないかと、いう気になるのは当然である。というのは、女性にとっても冒険ものは楽しいからである。⁹⁾ しかも、多くの女性は、男性だけが勇敢に活躍する冒険物語の中で、「アクションもので、すぐ『キャー!』と言って主人公の男の足をひっぱっちゃうような、そのくせ主人公と恋仲になっちゃうようなおねえちゃん」¹⁰⁾ としてではなく、自ら冒険し、時には窮地に陥った男性を助けに行くような女性の登場人物に自己を投影してみたいと思っているのである。

おとぎ話は、繰り返し語り継がれることによって、固定化されたジェンダーのイメージを再生産し続けているが、『リボンの騎士』は、男装した王女という仕掛けを用いることにより、おとぎ話の固定化されたジェンダーを解体し、再構築して見せるのである。サファイアは、男と女の両方の心を持つように創造されていることによって、完全な男性と完全な女性という二面を持ち合わせている。そのため、彼女は、男性の持つとされる行動力や社会的自由と女性の持つとされる優しさなどの特質を兼ね備えた両性具有的な女性として提示されるのである。つまり、自由と行動力を得るということは、女性の部分を切り捨てて男性化するというのではないことを、サファイアの存在は示しているのである。そのため、おとぎ話の中のステレオタイプの女性の描き方に違和感を覚える女性たちにとって、ただ男性に助けられるのを待つのではなく主体性を持って行動するお姫さまサファイアが発するメッセージは新鮮であり、胸のすくような思いがするのである。

4. 「王子さま」と男装：『少女革命ウテナ』

1996年から1998年まで『ちゃお』に連載された、さいとうちほ・ビーパパス『少女革命ウテナ』¹¹⁾ も、男装によってジェンダーの問題を提起する漫画である。主人公ウテナは活発でスポーツ万能の少女であるが、自分のことをボクと呼び、女生徒用の制服ではなく、校則に反して男物の学生服にショートパンツといういでたちで中学校に通っている（図2参照）。ウテナの男装は、彼女が男性になりすますための手段ではないという意味で、厳密には『リボンの騎士』のサファイアの男装とは異なる。しかしながら、彼女の男装が、「王子さまになるため」であるという、ジェンダーを越えるための手段として用いられているという点は、『リボンの騎士』の男装の流れを汲むものであると言えよう。

ウテナの男装は、サファイアの場合とは違って、女性のジェンダーの制約を超えて男性

と同じような社会的な自由を獲得するための手段ではない。ウテナが目指すのは、「守られるお姫さまより王子さまがいい」（第1巻；p. 86）という理由で、「王子さま」になること、つまり、使い古されたおとぎ話の男女の関係、すなわち、お姫さまは守ってくれる王子さまを待つものだというパターンを解体することなのである。ウテナは、男装して男言葉で話すことと「男でも女でも強さと気高さを失わない人間を『王子さま』という」（第1巻；p. 127）というレトリックによって、「王子」という記号を手に入れようとする。このため、作者は「王子」という記号を導入しやすくするために、（この漫画の舞台は日本なのであるが、）西洋のおとぎ話のイメージを喚起させるような、フェンシングによる決闘や、奪われた指輪、世界を変えるというディオスの剣、決闘に勝った者に与えられるバラの花嫁などのおとぎ話にお決まりの要素を作品の随所に散りばめ、男性の登場人物に「お姫さまを守るためなら騎士は命だって投げ出す覚悟ですから」（第2巻；p. 39）とすら言わせるのである。

女性の王子というウテナの設定は、『リボンの騎士』のサファイアの場合と同じである。しかしながら、ウテナがサファイアと異なるのは、サファイアが男性の王子そのものを演じているのとは違って、ウテナはあくまでも女性として王子の役割をするように設定されているという点である。『少女革命ウテナ』における男装は、ウテナが「王子さま」を目指すという筋立てのために、一見、女性性の否定の手段であるかのように思われるが、実はそうではない。ウテナは、「王子さま」になるために男装するのであるが、だからと言って、彼女は、自分が女性であることを嫌い、男性になりたいと思っているわけではない。このようなウテナの女性性は、彼女の服装に象徴的に表されている。¹²⁾ ウテナの学生服は男性が着るものではあるが、他の男子学生が着ているものと全く同じという訳ではなく、彼女はショートパンツをはき、女性らしい体型を目立たせるような服を着ているのである。また、彼女がスカートではなくショートパンツをはくのも、「こっちの方がボクの性格に合っている。スカートはすぐやぶれるから。ボクは走ったり飛び降りたりばっかりしているからミニスカートだと男どもにしょっちゅう下着のぞかれてふゆかいだ。だからこっちのほうが合理的なんだ」（第1巻；p. 5）という理由からであり、女性の誰もが知っている、スカートをはいた時の活発な動きのしにくさを嫌っているためである。もちろん、ここでは、スカートには、女性というジェンダーによる制約が象徴されているのであるが、彼女が嫌っているのは、自分が女性であることではなく、女性に科される制約、すなわち、『女の子はこうしなきゃダメだ』という魔法使いの呪文¹³⁾ に縛られることなのである。

『少女革命ウテナ』における中心的なプロットのひとつは、ウテナが危機に瀕した姫宮アンシーという少女を救い出す話である。すなわち、ここでは、王子が姫を救い出すという、おとぎ話のパターンが踏襲されているながら、王子が女性であるというジェンダーの逆転が試みられているのである。さらに、それに並行して進行するエピソードとして、ウテナが「王子さま」と呼ぶ初恋の男性ディオスの探索があるが、女性である彼女がディオスを捜し出すために激しい闘いを繰り広げ、悪に抵抗して自らを城に封じ込め身動き出来なくなった「王子」ディオスのもとに到達するのは、まさに、おとぎ話において、王子が姫を救い出しに行くパターンの逆転なのである。

上にも述べたように、『少女革命ウテナ』は、女性のウテナがおとぎ話の王子さながらに、危険をものともしない活躍をする物語であると同時に、女性が女性を救う物語でもあ

る。ウテナは、決闘の勝者に与えられる「バラの花嫁」として勝者の言うがままに従う姫宮アンシーを救うことを決意する。アンシーは、姫宮という名前の他に、その主体性のない依存的な性格や、勇者への褒美として与えられる「花嫁」であるということからも、おとぎ話のお姫さまを誇張して模した存在であることは明らかである。アンシーの思考停止の状態つまり精神的な死の状態は、後に彼女が陥る深い眠りに象徴される。ウテナは、他人の意のままになるアンシーに、「君は決闘に勝った奴なら誰のものにでもなるわけ？」(第1巻；p. 147)、「君の意志はないの？」(第4巻；p. 84)と問いかけて、彼女に主体性を持たせ、自己決定するための意志の力を呼び起こそうとする。この試みは失敗に終わり、ウテナは、おとぎ話そのままに、城の中に捕らわれて深い眠りに陥っているアンシーを、文字通り、救出するために闘うのである。ここで、おとぎ話の王子をただ待つだけのお姫さまと完全に重ね合わされているアンシーは、主体的に行動することが出来ず、男性に従属するというような普遍化された因習的な女性像となる。従って、ウテナが「王子」として行おうとしているのは、固定化されたジェンダー意識が作り上げた女性のステレオタイプの解体であるとも言える。敵対する男性に「ボクが王子さまになる……！ あなたを倒してその指輪をとりかえて世界を革命する力を手に入れてボクが姫宮を救う」(第5巻；p. 23)と宣言する時、ウテナは、「王子さま」の持つかっこよさや自由さだけでなく、「王子さま」の負わねばならない責任に目覚めるのであり、危険を冒してアンシーが眠る城に入り、身を挺して彼女を救おうとするのである。一見荒唐無稽なこの漫画の中で、ウテナが若い女性の読者に向けて発するメッセージは、自らの意志を持ち、行動することの重要性、しかも、それは、王子さま、すなわち男性にだけ許されているのではなく、女性にも可能であるということである。ウテナの言葉を借りれば、女性も「王子さま」になれるということなのである。つまり、受け身的に王子さまを待ち続けたり、自分を引っ張ってくれる相手に依存したりするのではなく、女性自らが主体性を持って行動することによって、自分の人生という物語の主役になるべきであるということをウテナは体現しているのである。

『リボンの騎士』は、男装という手段を用いて、女性の感じるジェンダーの縛りを解く試みをした優れた先駆的な作品であるが、男装していない時のサファイアがあまりにも因習的な女性像であることや、彼女の勇気や行動力などのいわゆる男性的な側面が、男として育てられたことによってしか獲得されていないこと、また、男装の時と女装の時のギャップが大きいこと、両性具有的と言っても、場面によって男性の部分と女性の部分を使い分けられており、男性的とされる要素と女性的とされる要素の統合があまり見られないことなど、時代の制約を感じさせる部分がある。それに対して、『リボンの騎士』の初出から40年以上後に発表された『少女革命ウテナ』は、極めてストレートに性とジェンダーの問題を取り上げている。女と男の心を持つとされるサファイアが、女の服と男の服を着替えるように、女性と男性の特質を状況に応じて使い分けているのに対して、ウテナは、マニッシュな服を着た女性のように、女性の特質の上に男性の特質を同時に重ね合わせて持っているのである。つまり、ウテナはサファイアとは違って、因習的に完璧な女性や男性ではないかわりに、男女の特質が統合された新しい女性像の可能性を表しているのである。そのため、彼女は、男装し、男性のように強く自由闊達ではあるものの、同性ならではの感性で、男性には理解出来ないアンシーの苦悩を察知し、彼女の救済を決意することが出来

るのである。ウテナが目指すのは、男性の振りをする王子さまではなく、女の「王子さま」なのである。すなわち、ウテナは、自由を得るために男性原理に呑み込まれるのではなく、女性原理を保ったままで、女性に制約を加えるジェンダーの呪縛から自由になり、因習的に男性のものとした主体性、強さ、勇気、行動力などといった、従来女性のものとはされてこなかった特質を併せ持った、統合された人間としての女性像の可能性を体現しているのである。

5. おわりに

『リボンの騎士』が発表された頃に比べると、少女漫画に現れる女性像は大いに変化した。女性の社会進出は珍しいことではなくなり、彼女たちは力強く行動的になり、もはや女性であることに引け目を感じることはなくなった。このような時代においても、少女漫画においては、女性が男性として振る舞う際の手段である男装は女性の読者に好感を持って受け止められている。なぜならば、漫画の中のいわゆる男装の麗人は、女性が今日でも折々感じている因習的なジェンダーの制約の壁を、苦もなく飛び越えてくれるからである。そして、そのような主人公が、女性として素敵な男性と恋をし、社会では男性と同じ自由を手にする様子に、女性としての心地よさを感じているのかも知れない。さらに、男装の、しかも、闘う女性が女性の読者に支持される理由は、このような主人公が、男性と同じようにわくわくする冒険の主人公になりたいという読者の気持ちを満足させてくれるということにあるであろう。つい最近まで、あらゆる血沸き肉踊る冒険の物語の中で、女の子は恐怖におののき、男性の主人公に助けを求め、時には彼の足かせとなる存在として位置付けられてきた。女性は、そのような固定化された女性像の押しつけに違和感を覚え、男性の助けを待つのではなく、自ら剣を手にとり、冒険の森に分け入り、悪者を懲らしめ、囚われの身の美青年を助け出すような女主人公に自分を重ね合わせてみたいと思うのである。

少女漫画の作家であるにもかかわらず、少年を主人公に選んだり、少年の世界を描いたりすることの多い萩尾望都や吉田秋生らをはじめとする女性漫画家たちが、上にあげたような、従来の固定化された因習的な女性像に強い不快感を持っているのは興味深い。¹⁴⁾ 彼女たちは、因習的なステレオタイプ的女性像の押しつけや、女性が感じるジェンダーの制約に対する違和感を解消する手段として、『リボンの騎士』や『革命少女ウテナ』などにおいて用いられている男装という仕掛けを用いる代わりに、もっぱら少年や少年の世界を描いているように思われる。その意味では、彼女たちが描く少年たちは、男装した女性の主人公と同様、女性に科せられた因習的な女性らしさのイメージを、さらに言えば、ジェンダーの制約を取り払って、登場人物を自由に羽ばたかせるための装置を施された女の子であると言えよう。その意味で、彼女たちの描く少年は、男装した少女に極めて類似している。すなわち、このような少年たちは、実のところ、女性という性にもジェンダーにも縛られず、因習にもとづく女性のマイナスイメージとも無縁で、男性と同じ社会的な自由を持った女性なのではないだろうか。男装の少女が、男性としての自由と女性としての内面性の両方を兼ね備えているのに対し、これらの少年たちは、女性としての内面の葛藤からも自由になった存在なのである。従って、男性として手に入れた自由に戸惑うこともな

ければ、男性を愛するときに、自分の女性性を否応なく直視させられるということもない。この少年たちは、少女漫画がたどり着いた、ジェンダーの呪縛から完全に自由になった理想の女性像であろうか。それとも、ジェンダーの問題からの逃避の表れなのであろうか。

註

- 1) 小論では、女性向けの漫画雑誌に掲載された漫画を少女漫画とよぶ。なお、小論でいう少女漫画は、成人向けのレディスコミックを除く女性向けの漫画（少女および女性漫画）の総称であり、読者を少女に限定した漫画作品のみを指すものではない。
- 2) 荷宮和子『手塚漫画のここちよさ』（光栄、1996）、p. 25.
- 3) 荷宮和子、p. 25.
- 4) 『リボンの騎士』は、女性が男性を演じる宝塚歌劇を意識して描かれたという。宝塚歌劇の魅力は、言うまでもなく、男装の麗人である。手塚悦子『『リボンの騎士』と宝塚歌劇』『リボンの騎士 — 少女クラブ版』（講談社漫画文庫、1999）、pp. 44-46 参照。
- 5) 手塚治虫『リボンの騎士 — 少女クラブ版』（講談社漫画文庫、1999）。
—— 『リボンの騎士』（全2巻）（講談社漫画文庫、1999）。
なお、小論における『リボンの騎士』についての論考は、後者の『リボンの騎士』（全2巻）にもとづく。
- 6) 当時の少女が『リボンの騎士』に夢中になった様子は、以下の文章の中にもうかがえる。
このころに『リボンの騎士』と出会ったことが、私には重要な出来事として刻み残されたことになる。まるで、私のひそかな願望をとっくに見抜いているような漫画ではないか。男女の性差はちょっとした天使のいたずらで変わってしまうていどのもので、まわりのだれにもこの主人公サファイアが男か女か、見破られずにいる。リアリズムで考えれば、そんなことはあり得ないだろうと言いたくもなるが、小学生の読者としては男としてふるまうときは完全に男になれるサファイアというこの女の子の存在にうっとりせずにはいられなかった。（津島佑子『『リボンの騎士』から与えられたもの』『リボンの騎士』第1巻（講談社文庫、1999）、p. 346.）
- 7) このように、少女漫画における男装は、ジェンダーによる制約を超えるという夢を叶えるための装置として機能している。この傾向は、その後の少女漫画にも受け継がれ、その最も傑出したもののひとつは、池田理代子『ベルサイユのばら』である。この漫画においては、貴族の家に生まれた女主人公オスカルは、生家の事情により、男として育てられる。なお、この作品は、テレビアニメ化された他、宝塚歌劇で繰り返し上演された。
- 8) なお、このような、ひたすら助けを待つ姫と彼女を救出に向かう王子や騎士というパターンは、依然として現代のファンタジーのいたるところに見受けられる。その一例として、ミヒャエル・エンデの『はてしない物語』があげられる。
- 9) そのような女性の気持ちは、里中真知子の少女時代を振り返った以下の文章の中で端的に代弁されている。

そういう時代に、少年雑誌には主人公が男らしく生きる姿が描かれていて、少

女雑誌には女の子が女らしく生きる姿が描かれているという分け方でした。けれども、少年漫画は冒険とか勇気が主題でしたから、女の子が見たって面白いわけです。私が小学校のころは、少年雑誌を見てるだけで「里中っておてんばだな」って言われたんです。『鉄腕アトム』を読んで「友情とは」とか「思いやりとは」と思って泣いていても、少年雑誌を持っているだけで、おてんば。……私はメメしい女の子と強いだけの男の子はいやでしたから、『鉄腕アトム』を読んでは泣いていましたし、ちばてつやの漫画には「女の子はこうでなくっちゃ」という強さがあったし、どっちも好きでした。(里中真知子「まんがとわたし」『マンガは時代を映す』(矢口高雄編)(東京書籍, 1995), pp.107-108.)

- 10) 吉田秋生の藤本由香里との対談での発言。

このインタビューの中で、少女漫画家である吉田は、主人公を含めて彼女の描く登場人物として、女性ではなく男性が圧倒的に多いことに関連して、「ただ私はアクションもので、すぐ『キャー!』とか言って主人公の男の足をひっぱっちゃうような、そのくせ主人公と恋仲になっちゃうようなおねえちゃんが嫌いだったんです」と述べている。(藤本由香里『少女まんが魂』(白泉社, 2000), p.131.)

- 11) さいとうちほ・ビーパパス『少女革命ウテナ』(全5巻)(小学館, 1997-98)。

小論における『少女革命ウテナ』からの引用はすべてこの版により、本文中に巻、頁数のみを記す。この作品もテレビアニメとして放映された。なお、原作者のさいとうちほは女性、ビーパパスは男性である。

- 12) ウテナの男装の中に見られる女性性は、村瀬ひろみ『フェミニズム・サブカルチャー批評宣言』においても指摘されている。(村瀬ひろみ『フェミニズム・サブカルチャー批評宣言』(春秋社, 2000), p.156.) また、この中で、ウテナの服装が「『男装』とは程遠い格好」であると評されているが、小論では、ウテナが着ているのが女生徒用の制服ではなく学生服であり、この服装を見た教師に「男用でしょ」(第1巻;p.5)と叱責されることから、男装の範疇に入ると考える。

- 13) 萩尾望都の藤本由香里とのインタビューでの発言。

この言葉は、萩尾望都が、自作の主人公が少年であることが多いことについて話した中で、女性の登場人物を描くのを躊躇する理由として述べたものである。「ああ、『女の子はこうしなきゃダメだ』という魔法使いの呪文がね、自分を縛っているんだなあって。だからどうしてもね、女性キャラクターを描く時に、なんかねえ、躊躇するんです、いろいろと。男のキャラクターのほうがラク。」(藤本由香里『少女まんが魂』(白泉社, 2000), p.205.)

- 14) 註10および註13参照。

他に、秋里和国の、男に生まれたかったという話の中での、以下のような発言もある。「なんで女が女言葉をしゃべらなきゃいけないのかとか、なんで女が足を開いてちゃいけないのかとか、いつもそればかり思ってすごしていた。だからなるべく一人でいるときは男言葉を使っていたりしてね。どうして男と女はこんなに違わなきゃいけないんだろう、といまだにおもうし。」(藤本由香里『少女まんが魂』(白泉社, 2000), p.155.)

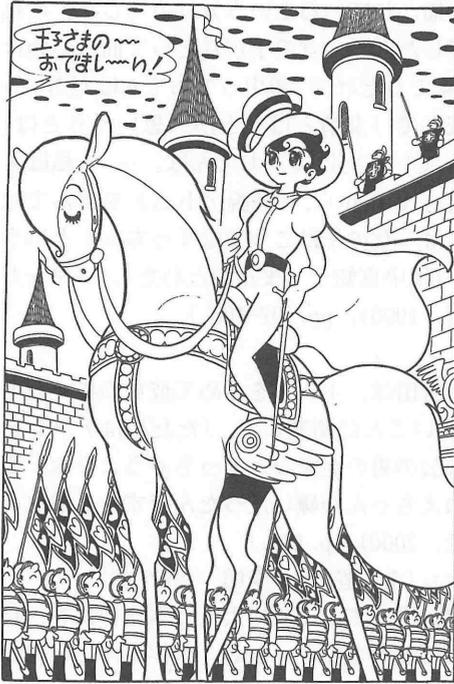


図1 『リボンの騎士』のサファイア



図2 『少女革命のウテナ』のウテナ